



有限会社 川竹庭園

【所在地】〒784-0042 安芸市土居698-2
 【TEL】0887-35-2088 【FAX】0887-35-2244
 【E-mail】yu-ka-wa@poem.ocn.ne.jp
 【URL】http://yu-ka-wa.co.jp/
 【設立】1986年(昭和61年)4月1日 ※創業:1921年(大正10年)
 【従業員】4名 【資本金】500万円
 【主たる業種】造園工事業

代表取締役
川竹 宏昌



企業概要 和風庭園、洋風庭園の造園工事、植栽、樹木の剪定、門や車庫などのエクステリア等、造園・外構工事のスペシャリスト。庭作りの設計・施工・管理も行う。

平成27年度
補正

ものづくり技術

バイオ

小規模型

設備投資のみ

チッパー機械の導入による「バイオ炭」を活用した「ミニ盆栽」の事業拡大

事業計画概要

近年注目されている「バイオ炭」は植物の生長を促進し、水質を浄化する効果があり、廃棄物であった樹木の枝葉を再利用することで環境に配慮した有効資材を作り出すことができる。本事業において、「ミニ盆栽」への活用と商品化を行っていく。

事業取組みの経緯

当社は大正10年に創業し、現在に至るまで95年間、高知県安芸市を中心に造園工事、エクステリア工事、樹木の剪定などを行ってきた。近年はガーデニングがブームとなり、庭や植物への関心が高まっているものの、造園においては厳しい経営環境にある。

そこで新たな事業として、2015年よりバイオ炭を使ったミニ盆栽の開発に着手した。盆栽は器の中に植物を植えて形を整え、鑑賞するものであり、樹種や大きさによって管理が難しく、専門的な知識を必要とする。最近では、手入れが簡単でインテリアとして気軽に楽しめるミニ盆栽が人気となり、幅広い年代に浸透してきているが、それでもなお、ミニ盆栽のオーナーは、植物が大きくなった場合、剪定や施肥の管理、水やりの間隔、病害虫への対処がわからないなど多くの問題を抱えている。

当社ではこれらの課題に対応する新たな商品を作るため、安芸市の伝統工芸である内原野焼きとコラボし、土の代わりにバイオ炭を入れた「bon彩」を開発した。

炭はアルカリ性が強いので土壌中のカビの発生を抑制し、表面にたくさんの穴が空いているので保水力に優れ、その水分がゆっくりと根に吸収される。水やりの頻度が少なくて済む上に、根全体が水浸しにならず、根腐れを防ぐことができる。

バイオ炭は、造園や剪定の作業過程で生じる枝葉や伐採枝を機械を使って細かく粉砕してチップ状にし、それを焼成・炭化して自作する。木材チップを焼成すると、バイオ炭は1/3の量になるため、大量の木材チップが必要となる。木や枝葉

の粉砕に使用する機械がチッパーで、以前は2ヵ月に1度くらいの割合でレンタルしていたが、原料となる剪定した枝葉を野積みにして保管していたため、発酵(腐敗)して原料として使えないものが生じる場合があり、木材チップの質・量ともに低下し、必要量のバイオ炭を作れず、生産量の調整がしづらい状況であった。

自社でチッパーを保有することで、随時木材チップの加工ができ、レンタルコストの削減、作業の円滑化、木材チップの質の向上、バイオ炭の量の確保につながる。



▲バイオ炭



▲木材チップ

実施内容

日立建機日本株製 自走式チッパー



粉砕したチップを空中に噴射するタイプのものが主流である中、本機は排出コンベアにて容器への回収が可能である。

事業取組みの成果

チッパー導入により、適当なタイミングで木材チップに加工することができるようになった。バイオ炭の焼成に適した質の良い木材チップが随時入手できるため、バイオ炭の必要量を賅うことができている。焼成した炭は洗って乾燥させ、ふるいにかけて粒を揃えて使用するが、チッパーで木材チップの大きさの調整ができるため、作業効率がよくなった。

必要量以上にできた木材チップは、発酵させて堆肥にし、植栽の際に使用しており、肥料のコスト削減につながった。また、植物の根元に撒く事で防草や凍結防止として使用できる。

「bon彩」は本事業終了後もさらなる改良を重ね、さらに育てやすい器を導入した。器は内原野焼きの陶芸家・西邨出氏の手によるもので、器そのものが酸素循環を行う特性を生かし、底に穴がない形状となっている。水受けの皿が必要ないため、植物のフォルムと器の美しさを存分に楽しむことができる。



当初は、バイオ炭の中に植物を植え込む形だったが、内側にもう一つ小さな器を作り、そこに根をビートモスで覆い寒冷紗で包み込み「根鉢」の形にした植物を入れ、外側にバイオ炭を入れる形にした。水は素焼きの器の壁を通してじわじわと根を潤す。1週間に1度バイオ炭側に水をたっぷりやるだけで、根に必要な水分が供給される。時々根を持ち上げてみて、寒冷紗から飛び出した細い根を切れば、それ以上大きくなることはない。

現在は3種類の「bon彩」を商品化しており、ふるさと納税の返礼品に採用され、地元産業である内原野焼きのPRにつながっている。販売に先立ち、庭師・川竹と土師・西邨の展覧会で発表した際には多方面から好評を博し、ブランド化への手ごたえを感じた。

製品内容

植物+器+炭で作る「bon彩」



商品名 : samon



商品名 : nikaku



商品名 : uraha

今後の活動予定・販売計画

今後は販路を厳選して、「bon彩」を価値あるブランドに育てることに注力する。いのちが宿る、育てる楽しさが味わえるアート作品としてブランドイメージを確立し、どこでも買える気軽なインテリア雑貨ではなく、一つ一つ手づくりの味を大切に上質な作品として販売していく。

盆栽は、海外では「BONSAI」として人気を博しており、絵画やインテリアと同様にその価値が認められている。日本独自の文化を発信するものとして、「bon彩」も海外輸出を行っていく。穀物などへの病害虫を防ぐ目的から、土の検査は厳しく、輸入を禁止している国もあるが、当社の「bon彩」は土は一切使用していないため、輸出可能な商品であると考えられる。しかしながら国によって規定が異なるため、現在、各国の検査について調べ、輸出の可能性を探っている。